

前回に引き続いて「すむ／すます」について見ていきたい。これまでは二号と三号を見てきたが、人間の「心」が「澄む」ための要件がいくつか示されていた。一つは、人間が「神のゆう事」を「心を静めて思案すること」であり、また一つは、親神やその思召を体現する人間が、相手の心を「澄ます」ということである。その際、そのようにみずからの心や相手の心を「澄ます」というのは、「むね」と「くち」によって、すなわち親神の思召を言葉で伝え、聞き分け、胸の内から思案し、悟るという一連の営みによって為されていくことも示されていた。さらには、そうして心が親神の話によって澄まされるのとは対照的に、澄んだ心によって親神の話を聞くことも求められており、「話を聞くこと」と「心を澄ますこと」とは循環的なプロセスとして解される。

二号と三号以外にもさらにみていこう。

- しんぢつ神のはたらきしかけたら
せかい一れつ心すみきる (五号 49)
- はたらきもいかなる事ともうかな
心うけとりしだいかやしを (五号 50)
- このかやしなにの事やともうかな
みちのりせんりへだてありても (五号 51)
- この事ハなにをゆうてもをもふても
うけとりしだいすぐにかやしを (五号 52)
- このかやしなんの事やともうなよ
せんあくともみなかやすてな (五号 53)
- よき事をゆうてもあしきをもふても
そのまゝすくにかやす事なり (五号 54)
- この事をみへきたならば一れつわ
どんなものでもみなすみわたる (五号 55)

五号のこの箇所では、最初の 49 で自動詞「澄む」の連用形に「切る」が接続して「世界中の心」が「澄み切る」と述べられて、最後の 55 でも同じように「渡る」が接続して「どんなものでもみな澄み渡る」と歌われている。そうした「澄み切る」「澄み渡る」という状態がどのようにしてもたらされるかと言うと、49 では「真実の神の働きをしかけたら」と述べられ、次の 50 でその「働き」というのは人間の心を受け取り次第お返し（「かやし」）をすることであると説明されている。さらに、それは道のりがたとえ千里隔たったところでも返すのであり（52）、人間が何を言っても思ってもその心を受け取り次第返すのであり（53）、善いことを言っても悪いことを思っても、いずれにしても善悪ともに直ぐに返すのであり（53・54）、こうした親神によるお返しが見えてきたなら「どんなものでもみな澄み渡る」と論されている（55）。こうして、ここでは前回見てきたような心を静めながら論し悟りを通して思案するという方途とは違って、みずからの心が親神と呼応していること（そうした呼応も親神の働きによる）の自覚によって、心が「澄む」ことが示されている。

- たんへとつとめをしへるこのもよふ
むねのうちよりみなそふぢする (七号 95)
- あとなるハにちへ心いさむでな

- よろづのつとめてへをつけるで (七号 96)
- このつとめどふゆう事にをもうかな
をびやほふそのたすけ一ぢよふ (七号 97)
- このたすけいかなる事ともうかな
ほふそせんよのつとめをしへる (七号 98)
- このみちをはやくをしへるこのつとめ
せかい一れつ心すまする (七号 99)
- このはなしどふゆう事にきいている
せかいたすけるもよふばかりを (七号 100)

七号のこの箇所では、99 で「つとめ」を通して「世界中の心を澄ませる」と歌われており、その「つとめ」は具体的には「をびやづとめ」「ほふそせんよのつとめ」（97）であり、敷衍的には「よろづのつとめ」（96）である。95 で「つとめを教える段取り」と述べられているように、ここでいう「つとめ」とはそれの完成に向けたプロセスまで含んだものであり、その要素の一つであり成果でもあるのが、「世界中の心を澄ませる」ことだといえよう。

- このたびハ神がをもていあらハれて
ぢうよぢぎいにはなしするから (十三号 92)
- どのよふな事もしんぢつするからハ
むねのうちよりひとりすみきる (十三号 93)
- いまゝでわ一れつハみなにんけんの
心ばかりてしやんしたれど (十三号 94)
- このたびわどのよな事にもにんけんの
心しやんわさらにいらんで (十三号 95)

十三号のこの箇所も、二号・三号で見たように親神の話によって（92）、また、それを実現する（「しんぢつする」）ことによって、「胸の内よりおのずと澄み切る」と述べられている。ただし、ここでは思案に関して、「にんけんの心」での思案（94・95）は「いらんで」と注意されている。『おふでさき通解』で「人間は、人間の心でしか思案できないのではないかと質問をされたことがあります、その意味では、親神様の思召を知った以上はということです」（482 頁）と説明されているように、思案といつても、人間の思いに拘泥するのではなく、親神の思召へと続いてくような思案があるのだと示されているのであろう。

- けふの日ハなにもしらすにいるけれど
あすにちをみよゑらいをふくハん (十六号 33)
- このみちがみへたるならばとのよふな
ものでもかなうものわあるまい (十六号 34)
- 月日にハどんなをもハくあるやらな
この心をばたれもしろまい (十六号 35)
- これをばなみへかけたならとこまても
むねのうちをばひとりすみきる (十六号 36)

最後に十六号のこの箇所では、親神の「思惑」が「見えかけたことなら」、胸の内がおのずと「澄み切る」と歌われている。その思惑とは、「つとめ」が実現していくような「往還道」とも表され、「つとめ」の完成に向うプロセスによって、あるいはその時々の「つとめ」の勤修によって、人間の心が「澄み切る」のだと解される。